

記念講演と矢羽根マーク



開館20周年記念講演として、東京五輪2020にマウンテンバイク競技で出場した山本幸平さんと、コーチを務めた鈴木雷太さんをお招きし、「五輪から学んだこと」をテーマに講演をしていただきました。

山本さんは過去4回連続で五輪に出場し、鈴木さんはシドニー五輪に選手として出場し、以降コーチとして五輪に携わっています。

現在はお二人とも松本に居を構え、マウンテンバイクの普及活動や子どもたちへの指導を行っています。松本に居を構えた理由は、①山に囲まれていること、②夜涼しいこと、③積雪が少ないこと、④日本のほぼ中央にあり、遠征に出やすいことなど、日本の中でもダントツで松本がマウンテンバイクをやる環境が充実しているとお話しされていました。過去7回のオリンピックにおいてもマウンテンバイクは長野県出身者が多く出場しており、環境が恵まれていることの裏付けでもあるそうです。

世界からみればマウンテンバイクの後進国ではあるが、松本から自転車文化を広げていきたいとお話されました。

自転車文化といえば、最近車道の脇に「矢羽根マーク」が表示されています。中央地区では、女鳥羽川沿い、西堀通り、お堀の北側の通りなどにあります。

この矢羽根マークは、自転車が走行する空間と進行方向を示しています。自転車専用レーンとは違い、整備費用を1/25に抑えながら、歩道上や車道上の事故の減少が期待されています。

矢羽根マーク上は自動車が走行することも可能ですが、自動車を運転する際は自転車や二輪車を改めて確認しましょう。

健康増進や環境への配慮のために、徒歩・自転車を選択する方も増えてきたと思います。とはいえ自動車がないと生活が出来ない現状もあります。歩行者・自転車・自動車がお互いを理解し交通ルールを順守しながら、松本での交通文化を築いていきましょう。



路面に表示された矢羽根マーク



五輪で実際に使用した衣装などの展示もありました☆



お三人のお話に興味深々☆

長元坊 チョウゲンボウ

落ちていたツバメの雛

6月初め、毎年の事であるが玄関先の軒下でツバメ夫婦がせっせと巣造りをしている。そして知らぬ間に卵を抱いている。主にメスが抱卵するらしいが、メスの食事時などはオスが代わりに抱卵するそうである。そして雛が孵るとにわかには賑やかになる。親鳥は引つ切り無しに餌を運び、子育てをしている。そうこうしているうちにまだ羽毛も生え揃っていない2羽の雛が床に落ちていた。また、巣は3分の1が欠け落ち、3羽の雛がしがみついている。早速小さい段ボールにもみほぐした新聞紙と2匹の雛を入れ、元の巣の横にとりつけた。親鳥の餌やりを見ていると元の巣の3羽には給餌をするが、段ボールの2羽には給餌の気配がない。床に落ちてからもう3時間以上は経っている。ゆで卵とビスケットを練り合わせて口に入れてやったが、自分から食べ

ようとはしない。このままでは育たない。やっぱり巣に戻さなければいけないと思った。

とりあえずカップラーメンの容器を半分にし、もみほぐした新聞紙と2羽の雛を入れて、元の巣を囲むようにガムテープで取り付けた。少し経つと親鳥が5羽に餌をやっている。うまくいった。それから数日後、ガムテープはがれカップが落ちていた。だいぶ大きくなった5羽の雛は元の巣にしがみついている。これはいけないと思い三脚でカップを持ち登ったところ、5羽が一斉に飛び立った。近くの電線に3羽、遠くの電線に2羽がいた。偶然だが巣立ちしたのかな？

次の日だったか玄関前に出ると、5羽のツバメが私の頭のすぐ上で舞っている。庭に出たらまた何回か頭上を舞ったあと飛び去っていった。

ツバメにも意思があるのかな？元気でなー！、来年も待ってるよ！と心の中でつぶやいていた。

(M・T)

全国的に貴重!?

松本の夏の行事と言われて、「青山様」・「ぼんぼん」を思い浮かべる人はどのくらいいるだろうか。

松本市歴史的風致維持向上計画によると、ぼんぼんは、紙で作った花を頭に飾り、浴衣にほおずき提灯をさげ、ポックリ下駄をはいて、夕方のひととき、「♪ぼんぼんととも〜」などと哀調を帯びたメロディーの唄を歌い町内を歩く行事。

また、青山様は「青山神社」という小さな幟を建てた神輿を担ぎ「青山様だい、ワッショイコラショ」などと声を掛けながら町内を巡る男の子の行事。多くはぼんぼんと同時期に行われ、ぼんぼんの行列と一緒に町内を巡る。町内を巡る際にお費銭を集めているところもある。神輿には先祖の霊を迎えるものといわれる青杉が盛られる。

二つの行事は、かつては全国の各地にみられたが、現在はほとんど伝わっておらず、江戸時代以来の習俗を伝える、全国的にも貴重な行事である。

中央地区内でも、人口減少により町会だけで行えないところもある。さらにコロナにより中止が続いているが、全国に誇れる行事を存続し、発信していきたいものだ。



町会紹介 丸の内町会

その昔、葵の馬場と地蔵清水とといった地籍が一体となり丸の内町会が形成された。

和4年5月1日公表データ、更に70歳以上の住民が全体の45%を占める超高齢者町会となっております。

一方、コロナ禍で町会活動が制限されるなか、3年も経過すると、活動への参加も加齢による身体的負担が増すことにより減少し、見守りへと重点を移す必要性が増すと共に、町会運営に参加する負担の軽減が求められています。前者では、初心に戻り、ご近所さん同士の声掛けを呼びかけから始め、「わたしの安心マップ」等の導入を目指し、即応体制の構築と強化、後者では、民主的な運営の下に町会の実情にあった自主的な活動を促す方策を検討し、次世代への移行を準備する時期にあると思われれます。

以前は、丸の内町会だけで、青山様の神輿を担ぎ、ほんぼん行列が行えたものです。しかしながら、60年が経過しますと、道路(市道15330号線)の拡張整備や商用ビルの建築等により、住民が移住減少すると共に住民の高齢化が進み、現在では、30世帯70名の住民が住む町となっています。これは、中央地区16町会では、世帯数では11番目、人口数では9番目となり(令

和4年5月1日公表データ)、更に70歳以上の住民が全体の45%を占める超高齢者町会となっております。

一方、コロナ禍で町会活動が制限されるなか、3年も経過すると、活動への参加も加齢による身体的負担が増すことにより減少し、見守りへと重点を移す必要性が増すと共に、町会運営に参加する負担の軽減が求められています。前者では、初心に戻り、ご近所さん同士の声掛けを呼びかけから始め、「わたしの安心マップ」等の導入を目指し、即応体制の構築と強化、後者では、民主的な運営の下に町会の実情にあった自主的な活動を促す方策を検討し、次世代への移行を準備する時期にあると思われれます。

文責：丸の内町会役員一同



日赤奉仕団視察研修

栗生楽泉園を訪ねて

日赤奉仕団主催、大手公民館共催でハンセン病療養施設である栗生楽泉園を訪ねた。場所は草津温泉の一角。湯の効能にすがって集まったハンセン病患者を、一か所に集めたことが栗生楽泉園の発端だという。

は特効薬のプロミンで完治し、感染力が弱い病気だということとを学んだ。科学的知見こそ、差別と偏見をなくす力になるはずだ。

今、栗生楽泉園の入所者の平均年齢は88歳。ハンセン病患者施設としての役割は終焉を迎えるだろう。だが、新たな偏見や差別を生まないためにも、栗生楽泉園の存在とその歴史を忘れてはいけない。

園に到着後、交流館で職員の方の説明とビデオ鑑賞、展示資料を見学。ハンセン病患者への偏見と差別の原点は「無らい県運動」であったという。各県から「らい患者」を一掃し、全国の施設に隔離しようとしたのである。

「魂の俳人」村越化石(本名・英彦)の写真が展示されていた。彼は現在の藤枝市に生まれ、旧制志太中学(現藤枝東高校)在学中の16歳で発病し、故郷を追われ、栗生楽泉園で生涯を閉じた人物。私は30年間藤枝市に居住し、藤枝東高校で教壇に立った者。何かの縁を感じる。多感な青年期、孫と同じ歳に家族と離れ、故郷を追われた村越の胸中を思うと、彼にかけるべき言葉を失う。

隣の重監房資料館を訪ねた。全国のハンセン病療養所で反抗した患者を閉じ込めた懲罰用施設である。再現された独房は、明り取りの小さな窓と食事差し入れ口があるだけ。酷暑・極寒の五つの地獄の世界。強烈な既視感が全身を貫いた。かつて訪れたポーランドのアーシュビッツを思い出したからである。

今回の研修で学んだことはあまりにも重く、十分に消化できないが、このような機会を提供してくださった日赤奉仕団と大手公民館の皆さんに感謝申し上げます。最後に、村越化石の句を紹介して筆をおく。

「寒燈を消すとき

母につながれり」

中央地区の樹木 ⑫

山法師(ヤマボウシ)

- 分 類 ミズキ科ミズキ属 落葉中高木
- 原産地 日本・中国・朝鮮半島
- 開花時期 5月～6月
- 花 色 ピンク・白・淡黄色
- 別 名 ヤマグルマ

多くが街路樹や庭木、公園木として利用され、中央地区では城西公園、辰巳の御庭、市役所東庁舎前、城西花壇横などに見られます。5～6月にきれいな花を咲かせますがあれは花ではなく総苞(そうほう)と言われる葉の変化した物で、中の実の回りになる粒の一つ一つが本当の花になります。果実は9月頃に赤く熟し、完熟した実はそのまま生食ができます。ほのかに甘くねっとりしていて秋の恵みの味として一粒味わってみるのもいいかもしれません。なお、市役所東庁舎の実が大きくてお勧めですが警備員さんに怒られません。悪しからず：(U・M)



市役所東庁舎前のヤマボウシの花